

〈小特集…古今集一一〇〇年によせて〉

●特別寄稿

披講作法点描

青柳 隆志（東京成徳大学助教）

和歌披講の作法を記した書物としては、まず、藤原清輔の『袋草子』が知られています。それ以後、例えば、定家の『和歌秘抄』や順徳院の『八雲御抄』などに残された記述により、平安・鎌倉期の歌会や歌合での披講のありようは、かなり具体的にわかるようになっていきます。

しかし、実際にそうした記述をもとに、当時の歌会を再現してみようとすると、意外な困難を伴うことが多いものです。それはつまり、記述が簡潔に過ぎるために、ある所作と所作の間の現実的な動きや、声の出し方などがわからず、こうもあろうかと想像によって補うしかない場合が多くあるからです。当時の人士であれば書かずともわかる部分には書かれないわけで、こうした点が再現を妨げることになりません。もっとも、江戸時代の「和歌会式」などには、こうした所作などが事細かに書かれているのですが、どうも雅趣に欠け、いかにも末流のありよう、という心持ちが

して、これに拠ることにはいささか戸惑いを覚えます。

現代のわれわれが新年に見聞する「歌会始」の作法は、明治初年に現在ののような形に改まってからも既に百年以上を閲しており、その間すこぶる洗練されたものになっていきますが、一見簡潔そのもののようなこの儀式の作法も、真似をしようとするときやはり、こうした時はどうするのだろう、という疑問を覚える時があります。どのような道にもおのずから秘伝に属する事柄が存するはずで、余人に知り得ないことがあつて当然ではありますが、やはり実際の披講に当たっては、心得ておかなければ困ってしまう点があります。

近年、披講会会長の坊城俊周氏が、『学習院史料館紀要』第13号（平17・3）に掲載された「宮中歌会始・読師及び諸役の所作」は、こうした疑問を一挙に氷解させる決定的な知見であり、披講に関わる者はすべからず参酌すべきものであります。しかし、右のご研究にも引用されていますが、現在より八十年ばかり前、昭和二年に、冷泉為系伯爵（二八八―一九四六）が、郢曲会の大原重明伯爵（一八八三―一九六八）に口授したとされる『歌会乃作法』なる一書——「郢曲会」のための私家版にて、巷間に出ることのなかったものと考えられますが——は、活版全百六十九頁からなり、全編披講作法の網羅的な検証で占められています。

○はしがき

或る日、私は、冷泉為系伯にお目にかかりました。それは、丁度、伯爵が京都から上京された時でもありました。話が、偶々、歌会の事に及んだ時に、冷泉伯の云はれたのには、当節詠歌の才能ある人は少くはありませんが、歌会の作法に至つては、これを知つて居る人は無いと云つても過言ではありませんまいとのことでした。私は、父が在世中、有志と謀つて、郢曲会と云ふものを組織し、父が会長となつて、歌の披講や、其の作法や、朗詠や、催馬楽などを、希望者にお教へ申して居りました。その後父は、既に没しまして、私不肖ながら、猶、その志を紹いで、中御門経恭侯を会長に仰ぎ、斯の会を継続すること、茲に、十年であります。抑も、斯の会たるや、既に、名づくるに郢曲と云ふことを以てし、会の本旨は、右等音楽的方面を主とし、而して、歌会の作法等は従で、あつたのであります。

今、冷泉伯の談を聞いて、其の作法の、將に、世人に忘れられやうとするのを慨き、斯の会の事業の一に加へやうと思つて、日を期して、伯の口授を受けやうとしたのであります。其の後、数回、伯の上京せらるるに際して、懇に、其の口授を受けることの出来たのは、洵に、私の幸福とする所で、且、斯道

の為に慶賀すべき所であります。私は因つて、一々、これを記録し、伯の上京せらるる毎に、其の疑を質し、勉めて、誤伝のないやうに致しました。又、他の記録に徴して、他流の作法と比較し、併せて、これを略記しました。但し、現時、歌会を催さうとする時に、このやうにしたならば宜しからうと思つた部分は、特に、私が筆を加へたのであります。爰に、其の稿、漸く、出来上りましたが、猶伯の示導に待つものが多いことと思ふのであります。今郢曲会々員の懇請に由つて未定稿として、之れを上梓して、お頒ち申す次第であります。

大正十五年十一月 伯爵 大原重明誌す

冷泉家、大原家（綾小路家）という披講の世界の二大勢力の主が、「当節詠歌の才能ある人は少なくはありませんが、歌会の作法に至つては、これを知つて居る人は無いと云つても過言ではありませんまい」という認識から、後世のためにと心血を注いだ書であり、幻の名著と呼んで差し支えないものであります。特に、一般的作法の記述のほかに、披講における現実的な注意が豊富に記されている点は非常に有益で、現実の披講にも役に立つと思われる部分が多々ありますので、ここにいわば点描の形で、ご紹介したいと思います。

○一人講師のこと

一人講師の時は、歌の読み難いことがあつても、講師に尋ねるすべがありません。故に、講師は自分の信じる所を以てこれを講じ、万一、誤読した時は、退場の後、詠出者に謝すのであります。これは講師としては、大に耻ぢるところであります。講師は歌の心得深き人を可とする所以であります。猶又、詠出者は講師に耻をかかさざる様、一見、読み易き様に認めるを情宜とします（一〇九頁）。

「一人講師」とは、読師や講頌等を伴わない、講師一人による略式の披講形式です。正式の歌会では、講師はもし読めない字があつた場合、読師に「いかに」と聞くことができるのですが、一人の場合には、自分だけが頼りということになります。ですから、初めて読む懐紙や短冊で、難しい言葉や判読できない文字が出てきた場合、大変に困ります。読み始めてから途中でやめるわけにもいかないので、えいっとばかりに適当に読む。合つていればよいですが、もし間違つていた場合には、歌の作者に申し訳がありませんし、見識を疑われます。よほど「心得深き」人でなければできないですし、また、懐紙などを書く側も、講師が読みやすいような字で書くのがよい、という注意もなされています。現実の披講にあつても、こうしたミステークが結

構あつたことが伺われます。

○講師の誤読は発声講頌は改めません。

講師の読み誤つた時は、発声講頌は誤講の通り唄ふのであります。その責は、講師にあります。

現在は、その誤講明なる時は、訂正して唄ひます。これは、本儀ではありませんけれども、強ひて、咎めません。現今、講頌は文台（或は浅硯蓋）の側に着坐して、歌を見ることが出来ますけれども昔は、読師・講師・発声以外は歌を見られません。講師の講ずるのを聞いて居るのでから、誤読だか何かわからないからであります（一一〇頁）。

これも、講師がもし歌を読み間違つたらどうするのか、というお話しです。発声・講頌は、講師の読んだとおりに披講するのが大原則なので、読み間違いに気づいたとしても、その間違つた状態のまま披講する、ということになります。発声・講頌は複数いますから、全員が揃つて誤りを正せるとは限らない、不揃いになるのを恐れて、こういう原則があるわけですが、最近では確かに、明らかな間違いがあると、さりげなく訂正するようです。右にもあるように、テーブルを囲む形の披講では、文台・硯蓋上の懐紙は全員がよく見えますし、少なくとも何回か練習はしていま

すから、「あ、間違つた」というのは直感的に分かります。披講をリードする発声が、意識的に直すと、不自然でなく聞こえます。しかし、座礼の場合、文台のはるか後方にいる講頌などは、懐紙が見えませんが、耳で聞いた講師の読み上げ通りに歌うしかない、そうになると、やはり講師は慎重の上にも慎重に、間違いなく読まなければならないわけです。

なお、発声についても、「甲調で唄はなければならない時、発声が誤つて乙調で唄つても、講頌はこれを改めてはいけません。声調乱れるからであります」という注意があります。

○自分の歌を披講せらるる時の注意

イ、自分の歌を披講せらるる時は、自分の名を講師が読み上げた時、体を少し前に屈し敬意を表すのであります。

(安座の時は、足を抜き、正座の後、体を少し前に屈し敬意を表すのであります)。

ロ、講師が、自分の歌を披講せらるる時は、講師は、自分で、これを講じて後敬意を表すのであります。

ハ、読師が、自分の歌を披講せらるる時は、講師が、自分の名を読み上げた時、敬意を表すのであります。(近來、これを誤つて講師が自分の歌を講じ終わつて後、敬意を表すことがあります。注意しなければなりません)。

せん)而して、読師の歌より後に猶、披講せらるべき歌ある時は、読師は、次の動作に移る必要上四句の程から安座し(立礼なれば着床)次の懐紙を出し、短冊なればこれを返すのであります。

二、発声の心得べきこと

発声は、自分の歌は、発声脇に譲つて、敬意を表すのであります。発声の歌が初最の場合には、発声は、自ら、末広(或は扇)を口にかざして唄ひ、二句から敬意を表すること前の通りであります。妻子の歌は発声脇に譲つて、敬意を表するのでありますが、その歌が最初の時には、発声は、自ら、扇を口にかざして唄ひ、二句から、敬意を表すのであります。

ホ、妻子の歌を披講せらるる時は、講師がその名を読み上げた時、敬意を表すのであります。尊族の親並びに他の卑族の親は斟酌に及びません(一一二頁)。

現代の歌会始では、披講諸役の歌は披講されませんが、自分の歌を披講したり聞いたりする機会はないのですが、内々の歌会では、しばしばこのような機会に遭遇します。すなわち、披講の現場で、自分の歌が読まれた時にどう振る舞えばよいか、ということです。自分の歌というものは、他の人が歌っている分にはともかくとして、自分で読んだり歌ったりするのは、存外気恥ずかしく、また抵抗のある

ものです。自然、何らか威儀を正す必要が感じられますし、こうした作法のあることは有り難く思われます。例えば、読師は懐紙や短冊を講師の前に提示する必要上、「敬意を表する」タイムリングが難しいことや、発声の場合は、「発声脇」（脇発声とも。読師の脇にいる講頌で、発声に次ぐポジション）に初句の発声を譲ること（二句からは講頌として歌って良いこととなります）、しかし、もし自分の歌が歌会の一番最初の歌だったら、扇で口を覆いながら発声を務めること（つまり、一番始めから別の人に自分の諸役をやってみらうことはできない）、など、現場に即してみれば一々肯綮に当たることばかりで、理にかなったありようです。「妻子の歌」への留意もあり、歌会というものが、黙劇のような礼法に則って進行するものであることのひとつの象徴のように思われます。

○婦人の講頌の心得

婦人は、古例は、披講の時は扇を口にかざして唄ふのであります。

現今は、何れでもよろしい。但し、まちまちにならない様にした方がよろしい（二二二頁）。

現代の歌会始は、「披講会」による男性のみの披講となっておりませんが、冷泉家の歌会では、男性・女性ともに披講

をします。女性の披講は、『亭子院歌合』のような古い例があります。江戸期以前には正式な形では見られないように思われます。ただ、このような記述のあることは、やはり、それなりの先例があつたことがわかります。「女流披講」も決して由縁なきことではないのです。

○仮名発音に関すること

仮名の発音は、現代の標準発音に随ふのがよろしいと思ひます。

（参考）古例は、各流とも、講師も講頌も「今日」、「尊し」、「思ふらむ」等は、箇々に、且つ「ハヒフヘホ」「マミムメモ」の発音を明瞭に「ケ、フ」「タ、フ、ト、シ」「オ、モ、フ、ラ、ム」と発音し、転呼音を用ひません。

現今でも、冷泉伯爵の主宰さるる歌会には、旧慣を重ぜられて、転呼音を用ひられません。これは私は、窃に敬意を払つて居る次第です（二二三頁）。

「たまふ」を「たまう」と読むか、「たもー」と読むか、披講の際にいつもその統一に苦労するところです。転呼音の原則からすれば「たもー」が正しいわけですが、自然に聞こえない場合もあつて、一筋縄ではいきません。歴史的仮名遣いの発音が、昭和初年の冷泉家の披講にあつてはま

だ保存されていた、という事実は興味深いものがあります。

○反数の時、発声の注意すべきこと

綾小路流にては、発声は、反数の時は、結句の終りの仮名を唄ふと同時に、初句を唄ひ出すのであります。即ち、この間暫く発声と講頌との声が重なるのであります。依つて、発声は、よく調子に注意しなければなりません。冷泉流にては、結句終りて、更に、発声唄ひ出すのであります（二二八頁）。

現行の歌会始の場合、天皇陛下は三反（上甲調・上甲調・甲調）、皇后陛下は二反（乙調・乙調）の繰り返しがあります。繰り返しの際、結句を披講し終わる直前に、発声が初句を歌い出すため、一瞬クロスする箇所があります。そのタイミングや、音の高さをきちんと取るのは難しく、発声の技倆が問われるところですが、これは、綾小路流のやり方で、冷泉流では結句の披講が終わってから、次の初句に移る、というやり方をとる、という指摘がなされています。およそ冷泉流の披講は、ゆったりと素朴に歌う、という感じのつよいもので、音楽性という点では、この「カノン」のことといい、やはり堂上樂家の綾小路流の特徴が顕れているといえるでしょう。

○披講には樂器の伴奏なし

披講には、樂器の伴奏はいたしません。嘗て琵琶、箏、三管を伴奏したことはないでもありませんが、披講は、元來音調の変化少く、且つ、音律を味ふと云ふよりも、寧ろ歌詞を味ふものでありますから、樂器の伴奏は反つて無用であります。以前、試みたことがありますけれども、永く行はれないのはこれがためであります（二一九頁）。

やや音楽的である綾小路流の披講でも、現在では樂器の伴奏は伴いません。歴史的に見れば、雅樂の譜面の形で書かれた和歌披講譜は数多く、伴奏は十分に可能であったと思われませんが、歌詞の内容の伝達を旨とする和歌の披講にあつては、音楽的な要素はあくまでも副次的なものであるといえます。常に意識を歌詞の方に置いていないと、前述のような間違いが生じます。やはりまずはじめに歌ありきで、講師・発声・講頌は、その歌の言葉を最も効果的に美しく伝えることをやはり本義とするものです。専門的音楽家による講頌が、ともすれば声わざの自慢となつて、しばしば歌人たちのそれと対立関係が生じたという歴史的経緯はあるにしても、やはり「披講は伴奏なし」として、音楽とは一線を画したこの姿勢は、披講の本質をよくあらわしたものだと言えるでしょう。

『歌会乃作法』の記述はまださらに膨大であり、学ぶべきことは多いですが、こうしたごく細かな注意点にも、長年にわたる披講の伝統が血を通わせていることがわかります。その意味において、本書はもっと知られて然るべきと考えます。

